20　謝観（利恒）と『中国医学大辞典』

天野陽介・小曽戸　洋
石野尚吾・花輪壽彦
北里研究所東洋医学総合研究所

謝観は、江蘇武進の人で光緒六年（一八八〇）に出生、観は名、字は利恒、晩年は澄斎老人と号した。伯祖（諱蘭生）は名医名儒、大父（諱葆初）は医薬界の名医、父（諱鐘英）は地理学の大家という家に生まれた謝観は、幼くして家学を受け経書・地理学を精究し、また医学古典を熟読した。光緒二十七年（一九〇一）、蘇州東呉大学中退、光緒三十一年（一九〇五）から広州で地理学を教授、三年で辞任。その後、上海商務印書館に勤め地理書を編纂。光緒三十四年、上海澄衷中学校長、二年で辞任。民国三年（一九一四）、再び上海商務印書館に勤め、地理書籍を編纂。『辞源』医学部門も担当した。民国六年（一九一七）上海中医専門学校が創設され校長として招聘される。民国十年（一九二一）、『中国医学大辞典』編纂、その後商務印書館を辞し上海に寓し医業を営む。民国十八年（一九二九）、国民党政府第一次中央衛生委員会は「廃止中医案」を採択。これに対して、中医協会を発起し反対活動を行う。全国医薬団体代表大会を召集、大会後に謝観を主席代表とした代表団が案の廃止を政府に請願。同年、政府は中医学校を中医伝習所、さらに中医学社に改名するよう通達。これに対し再び全国医薬団体代表大会を召集、反対活動を展開する。その後、何度も中医代表大会主席や医団監委主席に推挙される。また、中央国医館および上海分館成立後、常務理事を任ずる。民国二年（一九五〇）没。著書には『中国医学大辞典』『中国医学源流論』『気功養生訣』『家用良方』などがある。

代表作である『中国医学大辞典』は民国十年（一九二一）に出版された。中国伝統医学分野において近年最大にして十分な内容をそなえた辞書とされている。出版以来、現在に至るまで様々な形で再版が重ねられている。

『中国医学大辞典』成立の背景には、西洋医学の伝播

と拡大、隆盛する中西医匯通の主張などに対して、伝統医学の重要性を訴える編者の信念を伺うことができる。その事を示すように自序の冒頭には次のように述べられている。「自新学説之興、而旧学遂為所詬病。医亦其一事也。然凡事不当偏循理論、而当兼課実際。今日西医所不能治之病、中医治之而効者、亦往往而有。」（新学説の興るより、旧学ついに［世の］詬病する所となる。医もまたその一事なり。然れども、およそ事は当に偏えに理論に循うべからず、しかして当に兼ねて実際に課すべし。今日、西医の治す能わざる所の病、中医これを治して効あるもの、また往々にしてあり。）

本書の収載項目はおよそ三万七一〇〇。凡例に「中国に古くからある医書に所載の名詞に限り収めた。」とあるように、多くの項目に典拠が掲げられている。収載範囲は病名・薬名・方名・身体・医家・医書・医学にわたる。注目すべきは、その収載範囲が日本にも及んでいることである。日本に関する項目は総数一一三、うち医家人名五〇、書籍六三がある。

『中国医学大辞典』は、西洋医学の流入、伝統医学崩壊の最中にあって、伝統医学を守るべくして編まれた辞書である。現代においても、その価値はいささかも損なわれていない。